

〈序 説〉

かつて C・ボイムカーは、古典的な論文「中世におけるプラトニズム」(Der Platonismus im Mittelalter 1916)において、中世哲学の全時代をとおしてプラトニズムが影響を与えたことを指摘した。また Corpus Platonicum Medii Aevi の刊行を企画した R・クリバンスキーは、この企画の序説とも言うべき「中世におけるプラトンの伝統の継続」(The Continuity of the Platonic Tradition during Middle Ages 1939)において、その表題のとおり、中世におけるプラトンの伝統の継続性を強調した。中世哲学の研究において、アリストテレスとともに、プラトン哲学の伝統の受容・継承・展開が重要であることは言うまでもない。

この中世哲学会では、第 24 回大会 (1975 年)において「プラトニズムと中世哲学」、第 25 回大会 (1976 年)において「中世哲学におけるプラトニズム——特に善の問題を中心に——」というテーマで二回のシンポジウムが行なわれた。しかし、その後の 35 年間の中世哲学研究の進展を考慮すると、再び「中世におけるプラトニズム」をシンポジウムのテーマとして取り上げることは、時宜を得ていると思われる。

そこで、今年度のシンポジウムでは、教父時代から 12 世紀におけるプラトニズムを取り上げることとし、松崎一平氏 (富山大学) にアウグスティヌスとプラトニズム、周藤多紀氏 (山口大学) にボエティウスのプラトニズム、中村秀樹氏 (上智大学) に 12 世紀のプラトニズムに関して、それぞれ提題をお願いし、また水落健治氏 (明治学院大学) に司会をお願いすることとした。また、シンポジウム企画チームの山内志朗が特別報告を行ない、超越概念を通して、次回のシンポジウムのテーマである 13 世紀プラトニズムへの展望を提示することとした。提題者の人数や時間の制約上、ディオニュシオス・アレオパギテースやスコトゥス・エリウゲナなどを取り上げることはできなかったが、ご寛恕を請う次第である。

来年度 (2012 年) は、今述べたとおり、イスラーム哲学、ユダヤ哲学も含めて 13 世紀のプラトニズムを取り上げることとする。

(シンポジウム企画チーム：堀江 聡・山内志朗・矢内義顕)
